

# Charlotte Perriand

ルイ・ヴィトンがオマージュを捧げた女性

## 世界で初めての インテリア・デザイナー シャルロット・ ペリアンについて

photograph: Takashi Ehara (p.479) / Hideaki Yoshihara  
interview & text: Minako Norimatsu (p.475, p.478, p.479 Paris),  
Akane Watanuki (p.474, p.476~p.477, p.479 Tokyo)

1920年代に初めて建築に内装とインテリア・デザインという概念を持ち込んだシャルロット・ペリアン。ル・コルビュジエと協働し、数々の優れた作品を残した彼女は、日本との関わりも深い。ルイ・ヴィトンのアイコン・コレクションで再び注目が集まるペリアンの人物像にフォーカス!



Charlotte Perriand 2013

使いやすいデザインで  
楽しく暮らすのが最良

シャルロット・ペリアンは1903年パリ生まれ。絵が上手で装飾学校を卒業し、1927年にル・コルビュジエのオフィスに入った。それまで総合的に考えられていなかった内装やインテリアを、建築に合わせてデザインすると、それが注目され、才能を開花させた。最初は、従来家具に使わなかった素材を用い、LCシリーズやシエーズ・ロンクといった家具で好評を得たが、次第にコンパクトで機能的な住宅設備のデザインを手がけるように。その際に最も影響を受けたのが日本での生活だった。2011年「シャルロット・ペリアンと日本」展をキュレーションした長門佐季さんは「ペリアンは来日した際、建築における合理性が既に日本では一般化していたことに驚きます。合理性という考え方は、その後の彼女の創作の大きな柱となりました」と語る。パリを拠点にしながら世界中を旅して回り、どの国でも臆せず持ち前の大らかさで土地の人とふれあい、生活文化を体験。民芸品や職人の手による日用品にインスパイアされたという。「ペリアンが手がけたキッチンやユニットバスなどを見ると、安くて手に入りやすい材料で組み合わせて作る、使いまわしが利く、そういう合理的発想で楽しく暮らすというのが根本に感じられます」と長門さん。ペリアンのデザインが機能的でありながら、ポップな色彩で遊び心もあるのは、楽しく生活するというシンプルなことが最も大切というメッセージにも受け取れる。

季さん

近代美術館  
。2011年神奈川県立  
鎌倉にて  
「シャルロット・  
日本」展を  
ヨシノ(同展は  
を巡回後、  
サイティエンヌ  
でも開催)。

Interview with  
Pernette Perriand-Barsac

# 一人娘が語る、偉大なる シャルロット・ペリアン

Proposition d'une Synthese des arts (1955) / Le Couloir, Fernand Léger, Charlotte Perriand  
©Photo: Yves Bresson / Musée d'art moderne de Saint-Etienne Métropole. ©ADADP Paris, mars 2013  
Fernand Léger / Composition à la figure (sur fond bleu) (1954)



## 「前進あるのみ。母はそんな女性でした」

シュプール(以下S) 子どもの頃からいつもアトリエでおかあさんの傍らにいたそうですね。娘として、シャルロット・ペリアンというデザイナーとともにした最も貴重な体験は何ですか？

ペルネット(以下P) とにかく、旅を通じていろいろな発見をしたこと。特に10~11歳の頃に住んだ日本が思い出深いです。

S 日本文化は、シャルロット自身のクリエイションにも多大な影響を与えましたよね。

P 影響ではなく、両者は出会うべくして出会ったといえるでしょう。(ペルネットが生まれる前の)初めての滞在で既に、彼女は自分のスタイルと、茶道にも見られる日本の精神との共通点を見つけたのです。

S 共通点とは、たとえばミニマリズム？

P ええ。彼女は1920年代から既に収納に重点を置き、「空」のスペースをつくることに執着していました。旅のためには、棚としても使えるラゲージ。早くも1927年に、収納ラゲージの詳細にわたるデザイン画を残しています。彼女の子どもの頃の、おもしろい逸話があるんですよ。盲腸で入院した際、何もない病室の美しさに感動した彼女は、帰宅すると涙を流したそうです。家にはモノがあまりすぎだ、と。

S ところで補佐役でもあったあなたがともにした仕事で、特に思い出深いプロジェクトは何ですか？

P パリのギャラリー、ルイズ・ロフリスです。フェルナン・レジェ、ピカソ、ブラックなどの絵画を採光によって引き立たせるため、彼女は「内装としての要素を極力抽象的にすること」を目指しました。のちに記録のためこのギャラリーを撮影しようとしたんですが、難しくして……なぜなら目立たせるべきデザイン要素がなかったからです。限りなくシンプルに見えますが、何度も熟考を重ねた、大変な作業によるたまものです。とてもすばらしい経験でした。

S パリでは住宅の内装もデザインしていますよね。

P ええ。アトリエのほか、1970年以降にデザイン

したアバルトマンがあります。59㎡と小さいながら、2フロアにわたり大きく感じられる住居です。シャルロットは生活空間に取りかかるとき、何人住むか、何人の客を招待できるか、そしてどの程度のモノの収納が必要か、について考え尽くしました。特に階段は6つもの案を練ったあげく、日本風の棚兼用のデザインにしたんです。ライフスタイルを重視し、機能性に美観が伴う、彼女独特のスタイルです。

S ところで、シャルロットは自分の名前を残すことにはあまり関心がなかったようですね。

P 確かに、自分のことはあまり語ろうとしませんでした。サヴォワのスキー小屋、「レ・ザルク」が完成した際も、たくさんのリクエストにもかかわらず、インタビューを受けなかったのを覚えています。「まだまだ仕事がたくさんあるから、ジャーナリストと話している時間はないの。クリエイティブな仕事」と。

S それでは、今になって、彼女の仕事モードに影響を与えていることについてはどう思いますか？

P 10年以上前には思いもよらなかった、興味深い現象です。シャルロット本人は、独特なスタイルをしていましたよ。いわば、シックでスポーティ。同じ服でも違う着方をするのが上手でした。特に注目を浴びたのは、90歳くらいのとき、ロンドンのロイヤル・アルバート・ホールでの式典で見た、博士帽にイッセイ ミヤケのドレス、ナイキのスニーカーといういでたち。彼女は三宅一生とは親しかったです。彼のためにモデルもしていましたから。

S 最後に、シャルロット・ペリアンがそのクリエイションだけでなく、女性としてたくさんの人を魅了しつづけるのはなぜでしょう？

P 彼女は常にアヴァンギャルドで前進を続け、後ろを振り返ることは一度もなかった人です。しかも自分の生活に見合うデザインをしたという点で、彼女の女性像とクリエイター像が延長線上にあるところが、今見てもモダンなんだと思います。



Maison Borot Montmartre, Paris / Charlotte Perriand  
©MARIE CLERIN - LAFFANOUR GALERIE DOWNTOWN / PARIS

(上奥) ちょうど一年前、フランス南部サンティエヌの近代美術館(www.mam-st-etienne.fr/)では「Charlotte Perriand, L'Aventure Japonaise」と題した展覧会が開かれた。同展より、写真は1955年に東京高島屋で開かれた「選擧 傳統 創造」展を再現したもの。スツール(1953年)、ローテーブルとラグ(ともに1954年)の3点はオリジナル。テーブル2点(ともに1953年)と椅子(1954年)は復刻版、書棚(2点とも1953年)は複製(上)シャルロット・ペリアンが、友人ポロ夫妻のバリ・モンマルトルの家のインテリアを手がけたのは、1950年代初期。昨年12月の「デザイン・マイアミ2013」では、ギャラリー・ダウスタウン(p.479参照)でこの家から抜粋したレアなピースで構成した展示を披露した。右の壁手前、引き戸のある給土用ハッチ(1952年)、テーブル(1950年頃)椅子とスツール(ともに1960年頃)

### Profile Pernette Perriand-Barsac



ペルネット・ペリアン・バルザック  
シャルロット・ペリアンの娘。  
1953~54年の1年半、日本に滞在。自身もインテリア・デザイナーとして母の仕事を手伝う。現在は夫ジャック・バルザックとともにパリに在住。母のアーカイブを管理し、展覧会をはじめ各プロジェクトの企画、本の監修などに携わる。

## 仕事はチームワークで

ペリアンは1927年に自身のアトリエを「屋根裏のバー」としてサロン・ドートンヌ(フランスの美術展覧会)に出展。それがきっかけとなり、ル・コルビュジエと、彼の協働者であるピエール・ジャンヌレと組むことに。そこで有名なL0シリーズやシェーズ・ロングが生まれた。「内装や家具のデザインが苦手だったル・コルビュジエは、彼女がオフィスに入ってとても助かったと思います」。1928年にはラ・ロッシュユールやチャーチ邸を3人で手がける。ほかにも優れたチームワークで数々の仕事を成功させ、その協働関係は彼女の独立後も続いた。ペリアンは、自分の名前を出すことには無関心で、コルビュジエのオフィスにいた頃に制作した家具は、3人の名前でクレジットされている。



©Archives Charlotte Perriand 2013

(上)パリのサン・シュルピス広場のシャルロット・ペリアンのアトリエ「屋根裏のバー」にて、1928年。(左から)ル・コルビュジエ、パーシー・スコールフィールド、シャルロット・ペリアン。撮影:ピエール・ジャンヌレ



## 性格は天真爛漫

パリに生まれたペリアン。しかし幼い頃に母の故郷であるブルゴーニュのムルリーで野山を走り回り、父の故郷フランス山岳地のサヴォワで雪にまみれて遊んだ経験が、彼女の性格を自由で開放的なものにした。オープンな性格は男性ばかりの建築界で仕事をするのにおあつらえ向き。気難しいル・コルビュジエとチームを組み、異国の地に臆することなく飛び込んだ。日本では工芸指導所の所員たちと旅館に泊まり温泉とスキーを満喫。仕事場であれ旅先であれ、周囲が男性ばかりでも溶け込むフランクな精神をもっていた。「生前の彼女を知っている多くの人が、エネルギーでチャームな女性だったと言います」。仕事のパートナーにも国籍や性別を問わない柔軟さがあった。

©Archives Charlotte Perriand 2013

(左)シャルロット・ペリアン、1935年

## キーワードで見る、「ペリアンってどんな人？」

デザイン史に名前を刻んだシャルロット・ペリアン。名前ほどは人柄が知られていないそのユニークな人物像を、長門さんのコメントを交えてキーワード別に紹介

©Archives Charlotte Perriand 2013

## 合理主義者

ペリアンの仕事の中でも特に持ち味が発揮されているのがキッチン。彼女が手がけたキッチンは、コンパクトでも効率性が考えられていて、デッドスペースは収納になり、人の動きが滞らないよう工夫されていた。しかも見た目に遊び心があり、デザインと機能性を両立。「彼女は来日したときに、日本の暮らしの中にある合理性に目を見張りました。寝室は布団を片づければ居間になり、襖を取りはずせば広くなる。可変する壁など狭い空間を有効に使うヒントを得て、それを自身のデザインにも生かすようになります」。当時の、女性に対して閉鎖的な社会が自分に合わないと感じていた彼女は、自ら便利な設備を考案し、家事労働から女性を解放しようとしたのかもしれない。

## 旅が大好き!

ヨーロッパ各地をはじめ、日本、中国、ベトナム、インド、ブラジル、タヒチと、世界中を旅して回ったペリアン。訪ねた国では土地の文化に着目。地元の人と交流し、伝統行事を積極的に見学、参加した。熱帯の国では海で泳ぎ、船で島を探検。寒帯の地では登山やスキーを堪能。来日した際は山形の雪山で子どもの頃から親しんだスキーで遊んだ。「ペリアンは好奇心旺盛な人。日本からの帰国途中に上陸したベトナムで、フランス人と再婚しますが、夫は戦後エールフランスに勤め海外に赴任。彼女はたびたび夫の赴任先に移住し、その土地の文化になじみました。訪れた国では著名な芸術家の作品より、職人の作った民芸品や日用品のほうが彼女の心の琴線に触れました」



(左)志賀高原でスキーをするシャルロット・ペリアン、1941年頃  
(左奥)船に乗るシャルロット・ペリアン

©Archives Charlotte Perriand / SPDA 2014

## 今でも買える! ペリアンの家具カタログ

ペリアンが手がけた家具の一部はイタリアのカッシーナ社が複製、現在、手に入れることができる。日本ではカッシーナ・イクスシーで販売中。ルイ・ヴィトンのアイコン・コレクションを記念したリミテッドエディションも



4



3



2



1

## インテリア・デザイナーの草分け

装飾学校を卒業したペリアンは、いわゆる建築のエリートではなかったが、スター建築家であるル・コルビュジエのオフィスに採用される。「それまで建物は建物、家具は家具と別々で考えられてきたものを、彼ら3人のチームは建物に合わせて内装や家具をデザインする画期的な方法で建築界の話題をさらいました。それらを手がけていたのがペリアンです。その存在がインテリア・デザインという概念を作りました。彼女のデザインは、ステンレスやガラス、ゴムといった当時は家具制作では使わない素材を組み合わせているのが特徴。新しいものを積極的に取り入れる柔軟性があり、モダンなデザインをするペリアンの腕にル・コルビュジエが目をつけたのも当然です」



(左)パリのサロン・ドートンヌに出品したペリアンの「屋根裏のバー」、1927年。家具：十字脚の折り畳みテーブル(木、ニッケルメッキ銅、1927年)、バーカウンター(1927年)、壁掛照明(1927年)、高座テーブル(ニッケルメッキ銅、赤革、1927年)、十字脚の低座椅子(クロムメッキ銅、革、1927年) 撮影：レップ

©Archives Charlotte Perriand / SPDA 2014

## 日本に住んでいた

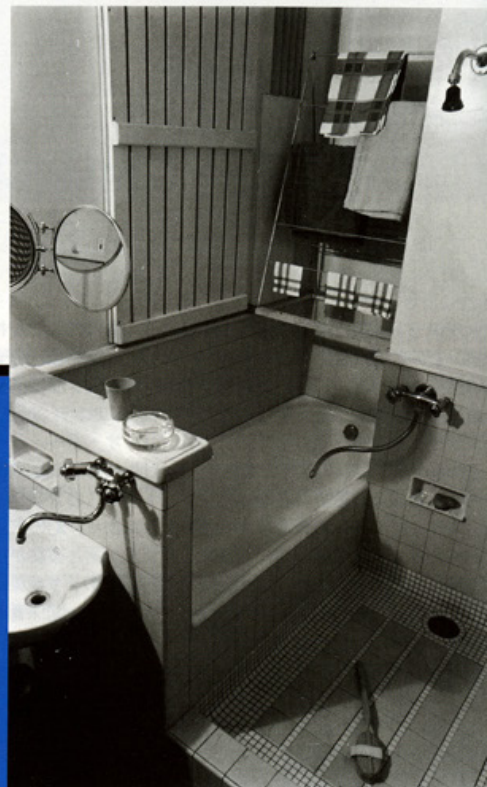
ペリアンの作品は日本の伝統からの影響が色濃い。彼女の最初の来日は戦時中の1940年、ル・コルビュジエのもとで同僚だった坂倉準三の推薦で日本の商工省の工芸指導顧問として招かれた。北や京都の工房やアトリエを訪ね、職人たちと交流。指導やアドバイスをしながら、出会った職人に制作を依頼した作品を、東京高島屋で開いた「選択 伝統 創造」展で展示。成果を示した。この覧会は当時のクリエイターたちに大きな影響を与えたという。42年に離日するが、戦後に再来日。「のとき、敗戦でアイデンティティを失いかけていた日本のクリエイターは、彼女の「欧米におもねず、日本の文化に誇りをもって」という言葉に感銘を受けたと語っています」



(上)シャルロット・ペリアン「木と藁の椅子」1956年。[在日フランス大使館の海軍士官エティエンヌ・シカール邸のためのモデル 1941年] / 個人蔵 撮影：鈴木静華

©Archives Charlotte Perriand / SPDA 2014

(左)シャルロット・ペリアンと工芸指導所員たち。左から米谷、藤井庄内、剣持勇、不詳、西川友武、丸田正孝、寺島祥五郎、福岡邦雄、東原卓馬、金子徳次郎、ペリアン、畑正夫、柳宗理。蔵王高湯温泉、松金屋旅館にて。1941年1月1日。撮影：臼井正夫／一般財団法人工芸財団



## Charlotte Perriand

(右奥)シャルロット・ペリアン「ユニットバス」[フォルム・ユティール(有用造形)]展に出品。サロン・デ・ザール・メナジュ、パリ、1952年

(右)シャルロット・ペリアン「ユニットバス」のための「ドロイング」1950年、「フォルム・ユティール(有用造形)」展、サロン・デ・ザール・メナジュ、パリ、1951年

©Archives Charlotte Perriand / SPDA 2014



## お風呂を研究

限られた空間で快適に暮らすという、庶民的な生活の視点をもって住宅設備を考えたペリアンは、バスルームでそれを体現。日本の風呂に感銘を受けて、その合理性を生かそうとした。彼女がデザインしたのは、狭いスペースに浴槽や洗い場、シャワー、石鹸置き場やタオルかけも備えつけられたユニットバスで、コンパクトな日本の風呂からの影響が多分に感じられる。寒い冬の東北でも好んで温泉に入っていたペリアン。「1960年代初頭に始まったスキーリゾート地・ザルクのプロジェクトでも、ユニットバスやキッチンをデザインしています。集合宿泊施設は狭い中に同じ規格の設備を入れるのに適しているの、彼女にとってはとてもよい機会だったのだと思います」

- 1 ペリアンが1927年にデザインした伸縮式の天板をもつテーブル。「オスピテ エクステンション テーブル」(H74.5 (TH72.5) × W175~300 × D90) ¥1,160,000
  - 2 ペリアンが自分の食卓用に作った回転椅子を、素材を替えて複製。「LC7 アウトドア スウィベルチェア」(H73 (SH50) × W62 × D52.5) ¥250,000
  - 3 京都の桂離宮で見た違い棚からインスパイアされた棚。「ニューアージュ MXバージョン」(H173.2 × W214.5 × D47.9) ¥1,700,000 (スライディングドア別)
  - 4 木製の「ベルジェ スツール」と「メリベル スツール」。「ベルジェ スツール」(H27 × W33 × D33) ¥65,000・「メリベル スツール」(H38 × W33 × D33) ¥80,000
  - 5 大学の共用部に作られたローテーブル。5タイプのサイズで構成されていて、スタッキングが可能。「ベタロ ローテーブル」(H29.5 × W68 × D42~) ¥126,000
  - 6 ペリアンが2014年ルイ・ヴィトンのアイコン・コレクションのインスピレーション源となり、LC4シェーズ・ロングがベースのリミテッドエディションが発売。世界限定1000台。マットレスはナチュラルサドルレザーを使用。(W60.5 × D160) ¥1,280,000 / カッシーナ・イクスシー青山本店(カッシーナ)
- ※すべて受注輸入品で納品まで約4か月を要するため税抜き価格での表記になります。



6



5

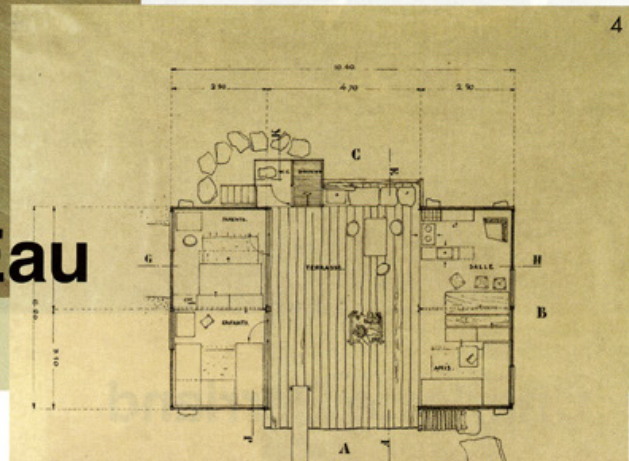
# ルイ・ヴィトンとペリアンの熱い関係

Louis Vuitton x  
Charlotte Perriand



## La Maison au Bord de l'Eau

メソンのミューズ、デザイナーとして、そして女性としてのペリアンに、ルイ・ヴィトンが「海辺の家」と「アイコン」で捧げたオマージュ



シャルロット・ペリアンは、旅、先見の明、本質へのこだわり、などさまざまな点で、ルイ・ヴィトンとの共通点をもつ。メゾンがペリアンへの敬愛をあらわにしたのは、昨年夏に発表され、現在店頭と並ぶ「アイコン・コレクション」。彼女のクリエイションをインスピレーション源とした、カプセル・コレクションだ。また昨年12月には、インテリア・デザインのアンヌアル・フェア「デザイン・マイアミ」にて、「ラ・メゾン・オ・ボー・ドゥ・ロー（海辺の家の意）」が実現した。これはペリアンが1934年に考案し、『L'Architecture d'Aujourd'hui』誌のコンテストで2等賞をとった。これまで建設されなかったリゾートハウスのプロジェクト。つまり、ベルネットのこだわり、ルイ・ヴィトンの資金とオーガナイズにより、幻のアイデアが80年後にやっと日の目を見たことになる。フェア開催中の6日間、デザイン画と彼女が撮った石や木の切り株の写真をもとにつくられた仮設住宅には、彼女の1929年〜42年のデザインに忠実に復刻生産した家具と「アイコン・コレクション」のアイテムを配して。デザイン関係者と一般ビジターに公開の後、オークションにかけられた。

### Louis Vuitton Miami Design District



### "Icones Collection"



- 1 デザイン・マイアミ2013での「ラ・メゾン・オ・ボー・ドゥ・ロー」外観。小さな空間を最大限に使い、機能性と美観を兼ねた心地よい暮らしを提案するペリアンの哲学が顕著。
- 2・3 「アイコン・コレクション」にあたってルイ・ヴィトンとコンタクトをとっていた折、試しにルイ・ヴィトンに提案してみたら思いのほかOKしてもらえて。ずっと前から現実化したかったから、やっと形になってとても幸せ」とベルネット
- 4 「ラ・メゾン・オ・ボー・ドゥ・ロー」は木のやさしいトーンを基に原色をさし、直線と曲線が共存した空間。ここに「アイコン・コレクション」のポップな色使いと幾何学パターンが映える
- 5 「ラ・メゾン・オ・ボー・ドゥ・ロー」のペリアンが残した図面
- 6・7・8 マイアミのデザイン地区にあるルイ・ヴィトンのポップアップストアでは、ペリアンのオリジナルの家具を配したディスプレイを。家具提供は、パリのギャラリー・ダウダウンタウン(p.479参照)

# デザイナーを魅了するペリアン

学ぶべきは情熱と行動力で  
素晴らしい作品を生み出す精神

伝統を大切にしつつ未来を  
見つめるモノづくりに、同感!

## Profile

吉原秀明。東京都出身。ファッションデザイナー。1998年に大出由紀子とともにgreenとして活動をスタート。2005年秋冬よりランウェイショーで新作を発表。2009年春夏コレクションをもって休止。約3年間の休止期間を経て、2013年秋冬コレクションよりHYKEとして活動再開。



Hideaki Yoshihara loves  
Charlotte Perriand



3 近々手に入れよう  
考えているのはペリアンが  
アフリカの椅子にイン  
スパイアされたという  
ロースツール「Tabouret」  
(1960年)。もうひとつは  
1950年代に作られた  
ウォールランプ。可動式の  
フラップで光の向きを  
変えられるのだそう



Christophe Lemaire loves  
Charlotte Perriand



## Profile

クリストフ・ルメール  
フランス東部の生まれ。  
1990年にレディスの  
ブランドを設立、のちに  
メンズもスタート。  
2002年よりラコステの、  
続いて2010年より  
エルメスのレディス・  
プレタポルテ部門の  
アーティスティック・  
ディレクター。



1 サヴォワ地方の「レ・ザルク」のためにデザインされたテーブル(1967年)は、オークにて購入した愛用品。ご当地の職人の技術したところが気に入る。2 今後手に入れたらと思っているのは、合板「Ombre」(1954年) 撮影:鈴木静華

「ペリアンの家具は昔から好きで、2000年に大出とともにパリのラ・ロッシュ邸を訪れたときには深い感動を覚えました。いつかは欲しいと思っていましたが、HYKEのプレスルームを開設するときに、懇意にしている広尾のSIGNに問い合わせたところ、運よく数脚見つけてくれました。その椅子は、厳密にはペリアンのデザインではなく、彼女がレ・ザルクの施設内のためにセレクトしたものの。スチールとレザーの組み合わせがいいんです。ペリアンは、当時男性中心だった業界に飛び込み、人並みはずれた情熱と行動力で前進するバイタリティがあったからこそ数々の名作を生み出したのではないのでしょうか。デザイナーとして学ぶべきいちばんの魅力はそこだと感じています」

「学生の頃から、ファッションと同じくらいデザインの世界も好きで、ペリアンの名作的作品については自然と親しむように。次第に彼女の経歴についても興味をもつた。いくつかの本を熟読したよ。そして人生を大いに楽しんだ彼女のポジティブな姿勢を知ります。ファンになったんだ。彼女の作品はどれも飽きがこないばかりか、気取りのない、機軸とかがいいね。日常生活が反映された、つまり現実感のある、万人のためのデザイン。東洋と西洋を完璧に融合させたこと、そして伝統という価値を深く理解してクラシックを重視したところも尊敬できる。自分と比べるなんてまったく畏れ多いけど、いいところを守りつつ、未来へと目を向けるという彼女の姿勢は、僕のクリエイションシーとも共通しているんじゃないかな。それに、日本の伝統文化に惹かれたという点も」

## TOKYO-PARIS オリジナルのペリアンに出会えるギャラリー

(右奥)チェア「Chaise à trois pieds」  
(右)キャビネット「Bahut no.1」と  
ツール「Tabouret」(1960年)  
※3点とも価格は  
SIGNまで問い合わせを



(右)シャルロット・ペリアンの展覧会をした際の、ギャラリー内観。  
右から松の木の6人用テーブル(1938年)、階段、奥の食器棚、ベッド、デスク(すべて1951年)



TOKYO  
SIGN

ペリアンの日本での活動に触れる展覧会を開催

広尾のSIGNはヴィンテージ家具を中心としたインテリアのセレクトショップ。ペリアンやジャン・ブルーヴェの品揃えには定評があり、神奈川県立近代美術館で行われた展覧会でも協力をしたほど。現在店内2階では、「シャルロット・ペリアンと日本」展を開催中。作品はもちろん、1955年に東京高島屋で開かれた「コルビュジエ・レジェ・ペリアン」展を一部再現するほか、来日した際の活動について記した、当時の国内外の雑誌などを展示。ペリアンの功績をより身近に感じることができる。家具類に関しては一部を除いて販売も行なっている。●SIGN 東京都渋谷区広尾3の2の13 ☎03(3498)7366 ☎11時~18時 ☎水曜 開催期間:~3月16日 無料

PARIS  
Galerie Downtown  
François Laffanour

パリでのペリアン探しのベストアドレスは、ここ

ギャラリー・ダウントウンのオーナー、フランソワ・ラファヌール氏は、ペリアンのコレクションの草分け的存在。1970年代末より彼女の作品を集めだし、アーカイブスが充実していた当時の情報収集にも貢献した。だからコレクターたちは、ここにペリアン探しにやってくる。彼いわく、「ペリアンは当時としては革新的に、シンプルというリュクス、そしてミニマルな楽しく詩的なデザインという新しいコンセプトを創りあげた。その新鮮さは、今日でもまったく褪せることがない。自分でも多数の家具を使っているけれど、どれも生活になじんでコンタクトなことはもちろん、素材そのものや木の厚みのおかげで、さわり心地のよさは格別だ」と  
●18, rue de Seine, 75006 Paris ☎01 46 33 82 41 www.galeriedowntown.com